

## 今月のトピックス 「穂いもちについて」

### 1) いもちの症状・被害が現れるまで

穂いちは症状が現れる部位によって、籾いもち、枝こういもち、穂首いもちと呼ばれます。発病が顕著になるのは感染してから 2 週間後です。感染時期が早いほど被害は大きいと言われており、出穂後 3~4 日の間に穂首に菌が侵入すると穂全体が白穂になってしまいます。それ以降に侵入すると穂全体が白穂になることはありませんが、収量と品質の低下を招きます。例えば出穂 15~20 日後に穂首が感染を受けると、約 10%の収量減となることが報告されています。また、品質への影響として、千粒重の低下や変色米の原因になることが知られており、最近では粒厚が薄く(小さく)なったり、米粒中の窒素含量が高まって食味が低下するとも言われます。

今年は 7 月 16 日から約 1 週間降雨が続き、その間に出穂初め~出穂期を迎えた圃場が多くなりました。白穂が多くなるかもしれません。

### 2) 穂いもちの品種特性

次の表は、本県の代表的なうるち米の穂いもち抵抗性についての品種特性です。一番栽培面積の多い「コシヒカリ」は穂いもちに弱く、次いで多い「キヌヒカリ」は中程度、「ヤマヒカリ」は強い品種です。また県育成品種の「みえのえみ」はやや強く、「みえのゆめ」は強い品種です。

	強	やや強	中	弱
極早生	ナツヒカリ			
早生		みえのえみ どんとこい	あきたこまち キヌヒカリ	コシヒカリ
中生	みえのゆめ ヤマヒカリ		うこん錦 黄金晴	
晩生				山田錦

いもち病の品種特性は施肥管理や、天候不順の際の予防防除の要否の目安になります。コシヒカリのように弱い品種では、穂肥の量を間違えると穂いもちの多発を招いたりします。自分の作っている品種の特性を理解することが、収量アップの近道です。

### 3) 薬剤抵抗性の出現

MBI-D 剤(ウィン剤、デラウス剤、アチーブ剤等)に耐性のできたいもち病菌が、全国各地で出現しています。効果の高い剤であっただけに広く普及しており、問題になりそうです。本県においても、昨年、効果の劣る事例が見つかりました。現在、科学技術振興センター農業研究部は県内各地のいもち菌を取り寄せ、耐性菌の分布状況を調査しています。

MBI-D 剤に限らず、薬剤によっては耐性菌の出る可能性があります。同じ薬剤の連用を避けると共に、一つの地域で同じ薬剤だけにならないような配慮が必要です。